

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 18 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370252

研究課題名(和文)『源氏物語』における本文の変遷とその受容に関する研究

研究課題名(英文)Research on changes and acceptance of the text in the "Tale of Genji"

研究代表者

新美 哲彦(NIIMI, Akihiko)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：90390492

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、『源氏物語』諸本および『源氏物語』享受資料を対象とし、中世から近世にかけての『源氏物語』諸本の流通状況や、受容の実態を具体的に記述しようと試みるものである。本研究は、下記の2点のテーマを核として進める。(1)『源氏物語』諸本に関する研究 (2)『源氏物語』享受資料に関する研究 このうち(1)に関しては、1回の学会発表と1本の論文の公刊を通し、今まで最善本と目されてきた大島本・明融本の問題点を指摘し、定家本『源氏物語』について整理した。また、(2)に関しては、3回の学会発表および1本の論文の公刊を通し、『奥』や近世における『源氏物語』の享受について考察した。

研究成果の概要(英文)：This research is directed to various versions of "Tale of Genji" and acceptances of "The Tale of Genji". More specifically, this research is about situation of various versions of "Tale of Genji" in through the early modern period from the Middle Ages, and is about reality of acceptances of "The Tale of Genji". This research centered on the theme of the following two points. (1) The research about various versions of "Tale of Genji". (2) The research about acceptances of "The Tale of Genji". (1) For, through the publication of one of the conference presentation and one of the paper, I pointed out the problems of Oshimabon and Myouyubon that have been the best book about "Tale of Genji" until now, and was organized for Teikabon "Tale of Genji". (2) For, through the publication of three conference presentations and one of the paper, I researched for the commentary, and discussed about acceptance of the "Tale of Genji" in the early modern period.

研究分野：日本文学

キーワード：源氏物語 享受 古注釈

1. 研究開始当初の背景

本研究は、『源氏物語』諸本の網羅的な調査を行う(1)『源氏物語』諸本に関する研究、具体的な資料や人物に注目した(2)『源氏物語』享受資料に関する研究という2項目を柱とした研究である。研究開始当初の学術的背景について以下に述べる。

(1)『源氏物語』諸本に関する研究

『源氏物語』諸系統の主要諸本を網羅した唯一の校本である池田亀鑑の『源氏物語大成』(1956)完成から半世紀余り経つ。『源氏物語大成』は偉大な業績ではあるが、拙稿「揺らく「青表紙本/青表紙本系」(『国語と国文学』83-10 2006年10月、『源氏物語の受容と生成』武蔵野書院 2008年9月再録)で明らかにした通り、「青表紙本系」「河内本系」「別本」という現在の諸本分類・呼称はさまざまな問題を有している。加うるに、『源氏物語大成』所収で、現在、所在不明の諸本もある一方、新たに報告された注目すべき諸本も多く、再整理の必要性が高まっている。このような状況下、信頼性の高い手法を用いて『源氏物語』本文を再整理し、諸本の位置関係を把握することは、『源氏物語』を研究する際、自分が今、『源氏物語』諸本の中のどのような本文を用いて研究し、その本文はどのような特徴や性格を有するのかを知るために必須の作業であろう。

(2)『源氏物語』享受資料に関する研究

『源氏物語』享受資料は『源氏物語』本文の変遷とも密接に関わる。加えて、『源氏物語』が成立時から現代に至るまでに、どのような人たちに、どのような場面で受容されて来たかを具体的に知る、重要な資料である。だが、諸作品相互の影響関係が不明であったり、諸本の再整理が必要な作品も多い上に、作成した人物周辺の文化圏および人間関係についても詳細が知られていないことが多い。

たとえば初期の『源氏物語』注釈書である定家作『奥入』は、『源氏物語』写本の巻末に付載されていることも多い。従来、『源氏物語』写本の巻末に『奥入』が付載されているか否かが、善本の判断基準の一つとなっていたが、拙稿「定家『奥入』の諸問題」(『中世の学芸と古典注釈』竹林舎 2011年9月)、「別冊『奥入』諸本の整理と特徴」(『源氏物語の展望』第十輯 三弥井書店 2011年9月)、「内閣文庫本系『奥入』諸本の位相と分類」(『平安文学の交響』勉誠出版 2012年5月)で考察したごとく、巻末付載『奥入』にもさまざまな系統が存在しており、『奥入』が付載されている『源氏物語』写本の価値判断に用いるのは危険である。これら巻末付載『奥入』を整理していくことで、『源氏物語』写本の流通経路や価値判断なども容易に出来るようになる。

また、「花屋玉栄と「ちやあ」 伝秀吉筆『源氏物語のおこり』から」(『平安文学の古注

釈と受容』第二集 武蔵野書院 2009年9月)等の論文で示したごとく、具体的な資料や人物に注目し、今までの情報を整理し、新資料を示すことで、中世における『源氏物語』享受の実態が具体的に明らかとなることが期待される。

2. 研究の目的

本研究は、『源氏物語』諸本の網羅的な調査を行う(1)『源氏物語』諸本に関する研究、具体的な資料や人物に注目した(2)『源氏物語』享受資料に関する研究という2項目を柱とする。以下に、研究開始当初の目的を記す。

(1)『源氏物語』諸本に関する研究

『源氏物語』諸本の網羅的な調査を行う。具体的には、国文学研究資料館・日本古典籍総合目録データベース等で判明する『源氏物語』諸本の書誌・書写年代・巻ごとのおおまかな系統を調査し、データ集積を行う。さらに、従来の文献学的手法に加え、海外において文献学への応用とその有効性が実証されており、凡例さえ定めてしまえば誰でも同様の結果を導き出せる手法(生物系統学で使用されるプログラムに抛る分析)を援用して、『源氏物語』における巻ごとの諸本分類および整理を試みる。巻ごとの諸本分類の試みとして、すでに拙稿「中世における源氏物語の本文」(『源氏物語の受容と生成』武蔵野書院 2008年9月)では夕顔巻の一部を、『源氏物語』諸本分類試案(同上)では空蝉巻を取り扱ったが、その研究を拡大・継続するために、文化系統学の専門家と連携して、諸本系統を容易に導けるプログラム開発も進める予定である。

(2)『源氏物語』享受資料に関する研究

現在、別冊『奥入』についてはほぼ調査を終了しており、今後は、『源氏物語』巻末付載『奥入』の調査を進める。具体的には、上記『源氏物語』諸本のデータ集積の際に、巻末付載『奥入』のデータも集積し、さらにその系統を調べることによって、『奥入』がどのような経緯で、どのように流布・変化していったのかを探っていく。

また、戦国時代の近衛家の女性である慶福院花屋玉栄が作成し、もしくは書写に関わった注釈書である『花屋抄』・『玉栄集』・専修大学蔵蜂須賀家旧蔵『源氏物語のおこり』を取り上げる。『花屋抄』・『玉栄集』は女性による『源氏物語』注釈書ということで注目されるものの、諸本関係も未整理であり、それぞれ翻刻はあるものの、善本の翻刻とは言い難い。『花屋抄』・『玉栄集』の諸本を整理し、詳細が知られていない花屋玉栄の生涯を調査することで、中世における女性の古典享受の実態が明らかになる。また専修大学蔵蜂須賀家旧蔵『源氏物語のおこり』は、花屋玉栄が「ちやあ」という女性に与えたものを豊

臣秀吉が書写したもののだが、その過程は興味深く（拙稿「花屋玉栄と「ちやあ」『平安文学の古注釈と受容』第二集 2009年9月）、さらに考察を深めることで、権力者による『源氏物語』享受の新たな一面が明らかになる。

3. 研究の方法

本研究は、『源氏物語』諸本および『源氏物語』享受資料を対象とし、主として、書誌学的調査と文献学的操作を通して、膨大な『源氏物語』諸本の再整理と、『源氏物語』享受資料個々の諸本系統・享受状況を解明することで、中世から近世にかけての『源氏物語』諸本の流通状況や、受容の実態を具体的に記述しようと試みるものである。本研究は、下記の2点のテーマを核として進める。

(1) 『源氏物語』諸本に関する研究

a. 『源氏物語』諸本の書誌的データに関する検討

b. 『源氏物語』諸本を系統分類する手法に関する検討

(2) 『源氏物語』享受資料に関する研究

具体的な研究方法は下記の通りである。

平成 25 年度

(1) a 『源氏物語』諸本の書誌的データに関する検討

本項目では、国文学研究資料館・日本古典籍総合目録データベース等で判明する『源氏物語』諸本を、各所蔵機関に赴き、書誌・書写年代・巻ごとのおおまかな系統の調査を行う。具体的には、前接する科学研究費による研究等により蓄積されたデータに付加していく形で、本研究により総合的な調査と分析を試みる。

平成 25 年度においては、早期の段階で、網羅的な調査の効率的な手法を、書誌学・古典学に関する研究の蓄積を有する連携研究者の佐々木・海野とともに検討・確定し、日本古典籍総合目録データベースに掲載される 350 点余のうち、約 100 点の調査と分析を目標とする。

(1) b 『源氏物語』諸本を系統分類する手法に関する検討

本項目では、『源氏物語』諸本を系統分類する際にどのような手法が効率的・効果的かを検討する。生物系統学のプログラムとして、SplitsTree や Spectronet 等があり、文献学に応用されているが、諸本の数値化に膨大な作業量を要する上に、文献学の場合、生物系統学における雑種に当たる混態が起こりやすく、作業も分析も容易ではない。よって、文化系統学に関する研究の蓄積がある研究者と連携し、文献学において、効率的に利用できるプログラムについて検討することを考えている。

(2) 『源氏物語』享受資料に関する研究

本項目では、『源氏物語』注釈書を主とした

享受資料の検討を行う。具体的には、『源氏物語』巻末付載『奥入』の調査、および戦国時代の近衛家の女性である慶福院花屋玉栄の調査を行う。『源氏物語』巻末に『奥入』が付載されていると報告される諸本は、現在、20 点に満たない。平成 25 年度においては、日本古典籍総合目録データベースに掲載される 350 点余のうち、国文学研究資料館でマイクロフィルムによる調査が可能な諸本の調査を行う予定である。また、花屋玉栄については、『花屋抄』・『玉栄集』の諸本調査および翻刻を進め、公刊を考えている。

平成 26 年度以降の計画

平成 26 年度以降も、原則として平成 25 年度の計画を踏襲し、『源氏物語』諸本の書誌的データの蓄積、および『奥入』、花屋玉栄を中心とした『源氏物語』の享受資料に関する研究を継続的に行う。

4. 研究成果

(1) 『源氏物語』諸本に関する研究

(2) 『源氏物語』享受資料に関する研究

それぞれの成果を以下に述べる。

(1) 『源氏物語』諸本に関する研究

平成 25 年度においては、(1) 『源氏物語』諸本に関する研究について、網羅的な調査の効率的な手法を、書誌学・古典学に関する研究の蓄積を有する連携研究者の佐々木・海野とともに検討・確定した。その上で、まず、『源氏物語』写本のうち、日本古典籍総合目録データベースに掲載される 350 点余を対象に調査を開始、約 50 点の調査と分析を行った。26 年度は、(1) に関して、「定家本『源氏物語』の諸問題 大島本と明融本の比較から見えるもの」と題して、中古文学 会関西西部会第 39 回例会シンポジウム「源氏物語 本文研究の可能性」(於佛教大学)において、定家本『源氏物語』のうち、最善本とされてきた大島本と、定家筆本の臨模本とされてきた明融本を比較し、問題点について考察した。

27 年度は「定家本『源氏物語』研究の現在 / 今後」(『新時代への源氏学』7 「複数化する源氏物語」竹林舎)と題して、定家本『源氏物語』の名称について整理した後、池田亀鑑の分類基準の問題点についてふれ、さらに大島本・明融本、巻末付載『奥入』について整理・考察した論を公刊。また、定家本『源氏物語』の主要伝本である大島本と明融本を比較することで、大島本・明融本の問題点を洗い出し、考察した論を「大島本『源氏物語』と東海大学蔵伝明融筆『源氏物語』の比較から見えるもの」(『源氏物語 本文研究の可能性』和泉書院)として刊行予定である。

(2) 『源氏物語』享受資料に関する研究

(2) に関しては、『修紫田舎源氏』の挿絵についても調査を進めており、平成 26 年夏にス

ロベニアでひらかれた The 14th International Conference of the European Association for Japanese Studies (於スロベニア・リュブリャナ大学)において、「The reception of Genji monogatari as seen through the illustrations for Nise Murasaki inaka Genji」と題して、近世板本の挿絵を中心に、『修紫田舎源氏』前後の挿絵や浮世絵について、考察した。

また、平成 27 年度に「近世における『源氏物語』」(早稲田大学国語教育学会春季例会)と題して、俗語訳『源氏物語』のうち梅翁『源氏物語』の挿絵を中心に考察。挿絵師の奥村政信の意図を解明。鎌倉期書写の巻を基幹とする池田本『源氏物語』巻末付載『奥入』について考察した後、『奥入』諸本相互の関係について考察した「池田本『源氏物語』巻末付載『奥入』について」(天理図書館報『ビブリア』144号)を刊行。さらに、中古文学会秋季大会において、「室町戦国期の『源氏物語』本の流通・注の伝播」と題した、室町戦国期における『源氏物語』の流通や注釈の流布に関するシンポジウムにおいてコーディネーターをつとめた。

諸本の悉皆調査、プログラムの作成までには至らなかったものの、今後の道筋も見えてきた。地道な調査を目的としたため、公刊された論考自体は少ないものの、おおむね順調に研究を遂行できたと言えよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

新美哲彦, 定家本『源氏物語』研究の現在/今後, 『新時代への源氏学』7「複数化する源氏物語」(竹林舎), 2015, pp.44-69, 査読無(依頼原稿)

新美哲彦, 池田本『源氏物語』巻末付載『奥入』について, 天理図書館報『ビブリア』144号, 2015, pp.3-42, 査読無(依頼原稿)

[学会発表](計4件)

新美哲彦, The reception of Genji monogatari as seen through the illustrations for Nise Murasaki inaka Genji, 14th International Conference of the European Association for Japanese Studies, 2014年8月30日, リュブリャナ大学(スロベニア), 発表(査読有)

新美哲彦, 定家本『源氏物語』の諸問題 大島本と明融本の比較から見えるもの, 中古文学会関西西部会第39回例会シンポジウム「源氏物語 本文研究の可能

性」, 2014年11月15日, 仏教大学(京都府), 招待講演

新美哲彦, 近世における『源氏物語』, 早稲田大学国語教育学会春季例会, 2015年4月25日, 早稲田大学(東京都), 招待講演

新美哲彦・他4名, シンポジウム・室町戦国期の『源氏物語』本の流通・注の伝播, 中古文学会秋季大会, 2015年10月24日, 県立広島大学(広島県), コーディネーター(依頼)

[図書](計0件)

[産業財産権] 出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他] ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新美哲彦(Niimi Akihiko)
早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授
研究者番号: 90390492

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

佐々木 孝浩(Sasaki Takahiro)
慶應大学・斯道文庫・教授
研究者番号: 20225874
海野 圭介(Unno Keisuke)
国文学研究資料館・准教授
研究者番号: 80346155